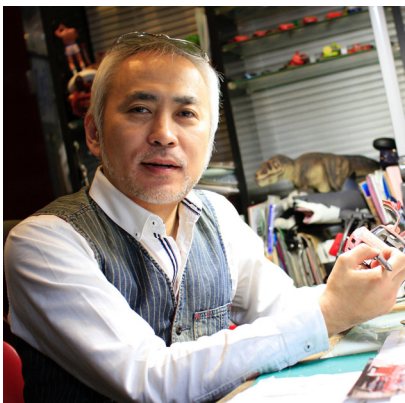




一枚の紙から独特の世界を 作り出す「紙の魔術師」 ペーパークラフト作家 太田隆司さん

にんじん焼酎「君暮らす街」のラベルでもお馴染みの太田隆司さん。太田さんは平面の紙を巧みに造形し、まるで魔法のように人や動物、クルマ、光や影、時間の流れを作り出しています。その世界は、平面の絵でも360度から見える完全な立体でもなく、紙の魅力を最大限に生かした不思議な世界です。

今号では、紙が持つ無限の可能性を広げ、独特の世界を表現する太田隆司さんにお話を伺いました。



「向こう三軒両隣」の地域の力を市内あちこちで目にしました。歩行・交通の安全のためや、お年寄りの家の前など、市民の皆様が自発的な雪かきのご協力、本当にありがとうございます。

当然市職員も早朝に雪かきに出勤されましたが、40年〜50年に一度の大雪のため、市内全域への細やかな対応ができず、お叱りもいただきました。誠に申し訳ありませんでした。十数年位前までは市内の土木建設会社の今村組が除雪用の機材を所有していて、大雪の時には自発的にほとんど無料で幹線道路を除雪してくれていましたが、長いデフレ不況で年間数百万かかる機材の保持が難しくなっ

た。今、開催中の3月市議会でも、市内各地の被害の状況や、除雪への対応、事前の備えなどのご指摘をいただいておりますので、しっかり検証・反省をして今後の雪を含めた自然災害への対策に更に万

太田さんは日本大学芸術学部デザイン学科在学時より、自動車のイラストを描き始めました。卒業後は本格的にペーパーアート作品の制作に専念し、1995年、自動車専門誌「CAR GRAPHIC」で、作品の連載を開始しました。クルマをあえて脇役にすることが評価されたそうです。

全国各地で個展などを開催した他、テレビ東京の「TVチャンピオン」ペーパークラフト王選手権で優勝するなど、多数の受賞歴もあります。

——ペーパークラフトを始めたきっかけはなんですか？

絵を描き始めた記憶も思い当たらないほど幼少から絵を描くのが大好きで、小学生の時には学級通信などに絵が掲載されていました。僕のなかで、ペーパークラフトは絵が膨らんだという感覚で、

全を期してまいります。

結びに、「怖い自然」ではなく、優しくてユーモアがあつて素敵な自然の話題です。2月に「清瀬の野鳥」の写真集が発行されました。市内写真家の佐々木義雄さんが十数年にわたって撮影してきた清瀬の野鳥の姿を、「自然を守る会」の協力を得て写真集にしたものです。ページをめくっていくと、119種類もの個性のある鳥たちの姿と、何とも言えないしぐさに心が癒されていきます。有名なカワセミの美しさだけではなく、スズメだって本当に愛らしいのです。清瀬は野鳥にも愛されています。

清瀬市長

渋谷 金太郎

絵との境界線はないので、きつかけはないんです。

——作品ができるまでの流れを教えてください

頭にあるたぐさんのイメージから一つ選び、取材・資料収集をして下絵を描く。下絵がしつかりしていないと、後の工程で後れを取るの、ほぼ完成形に近いものを描きます。

次に単品で描いたクルマや建物などを数単位でコピーし、切り絵のように貼りこんで、違和感のない構図を探していく。これは、14年一緒にやっているRIGHT HAND（右腕の意味を込めている）の新井隆と共同で行います。

僕が作品全体のイメージを作り、新井隆が緻密な計算で背景を画面化する。かなり地道な作業ですが、これで一枚の絵が正しい見取り図で完成します。

そして最後は、ミリ単位でのカットイング。制作の最終段階で設計図通りにいかなかったり、紙の厚さの違いで誤差が生じたりすることもあり、一番配慮が必要な作業です。

紙や切り方にもこだわりがあり、数えきれない種類の質感・色の紙からイメージにピッタリのものを選びます。グラデーション（なだらかな色の階調）を出したいときは、微妙に色が異なる紙と紙を



さまざまな質感の紙（上）と、フリーハンドで行うカットイング作業（下）

下から上へ重ねると、違和感なく自然に色の変化を出せ、服のしわを作るときは、カッターを下から上へ入れると紙の切れ目が目立たずに、自然になる。使用するのはカッターだけです。

制作には基本的には1か月、大型の作品で2か月かかります。

作品にはドラマを醸し出し 空気を作る

毎月納期に追われ時間との戦いが苦しみですが、どんな作品も「手放したくないモノ」に仕上げます。妥協するくらいなら違う方法があると考え、必ず自分の合格ラインに達するものを送り出します。

例えば作品が小ぶりになっても、小さな作品があるおかげで他の作品が大きく見え、かえって変化が楽しめる、それは妥協ではなく、作品世界を広げるための工夫なんです。

僕は「切りとられた紙の情景ステージ」をつくっています。だから日常シーンを演出できる身近な面白い場所を題材に選びます。

例えば普段何げなく見過ごしている、けやき通りにある店に並ぶクルマ達。ここに注目し、小さなステージにまとめると面白い。壊れた車の前に立ち止まっている人なんていませんが、あえて、小学生がガラクタを楽器に楽団をやっているというドラマを添える。実際にある風景+僕のドラマ（演出）で作品が成り立つんです。

細かい紙細工をつくる方はたくさんいますが、僕の作品で伝えたいのは「ドラマ」。絵や作品のなかにドラマがあり、そこから声が聞こえてきたり風が吹いたりする。ドラマというのは空気のように



キャラクターにあくまのクリスマス通りを演出した作品「くまのクリスマス通り」

に醸し出すものです。つまり、僕は空気を作っているペーパーアーティストなんです（笑）。作品を見ていて物語が聞こえてきたら、その場所はまさに作品の空気を感じられるビューポイントです。

企画展「東京と清瀬」

——郷土博物館で開催中の企画展「東京と清瀬」にはどのような想いが込められていますか？

オリンピックが東京に決まった瞬間、何かしたいと思いました。

気持ちの高揚や楽しみはまちの活性につながる。人は感受性を刺激されると笑顔になり、生活や人生を楽しめる。この分野で僕も貢献できるのではないか。そんな一つのささやかな貢献が今回の企画展でもあります。

作品を見るときは、鑑賞するのではなく「こんな車あったよね」「この場所知っている」など、雑談をしながら過ごしてほしい。展示会の会場が一つのパークで、企画展はアトラクションだと思って東京作品を散策してほしいです。

清瀬のまちのペーパーアート

——これからの清瀬のまちに望むことはどんなことですか？

僕の作品は、実家の商店の商品の接着剤から始まった、清瀬発祥

のものです。だから「太田隆司の作品」ではなく「清瀬が育てた作品」として、皆が共有してくれればすごくうれしい。「清瀬生まれのペーパーアート」として、まちに作品を浸透させたい。

例えば、和菓子屋さんの紙袋や病院の診察券のカードなど、いろいろなものに絵をプリントし、浸透させたい。小さなまちのブランドとして、小さな誇りに思ってもらいたい。それが僕が清瀬のまちに望むことの一つです。

最後の一段を目指して

——今後の目標は何ですか？

これまで、一段一段、階段を上ってきたのですが、最後の一段がすごく高く、なかなかたどりつけない。今まで上ってきた階段の最後の一段に着いた時に、パッと開ける世界があると思うんです。

——最後の一段とは？

テレビや新聞、雑誌などのメディアにもっと出演することです。作品としては、例えばドラマのオープニングや朝の連ドラの背景で放映してほしい、自分自身としては、アーティストとして、作品のコメント、想いやアイデアを求められるような役割も果たしていきたいです。その「あと一步」が、僕の目標の一つです。

他にも目標はたくさんあります。が、これからも映画監督のような感覚で、人の気持ちをつかみ、皆さんに喜んでいただけるようなモノを作り続けたいです。

3月30日(日)まで、郷土博物館で太田さんの企画展を開催中です（詳細は市報3月1日号1面参照）。ぜひお越しください。